

5章 湯地点・イケガナル地点調査の総括

これまで山岳霊場三徳山の南面、神倉地区に所在する「湯」「イケガナル」両地点の遺跡で見出し確認できた遺構の概要を報告した。当遺跡の特徴は①遺物が皆無であること、②遺構が通常の遺跡のように地面（地山）に刻まれているのではなく、目的に応じた大きさの礫を並べて石列や区画を構成するか、あるいは礫を数段積み上げて壇を設けた痕跡が殆どを占める。という特異な内容である。しかも、標高は652mから始まり、最高点が667mで秀麗な自然林に覆われた台形状を呈する三徳山山頂部（山頂の標高899m）を正面に見据えることが可能な高所（表紙・裏表紙参照）に営まれており、人の生活圏をはるかに越えた自然界に位置している。このような条件を有する遺跡は一般的には山岳信仰に関連する禁忌（タブー）の厳格な遺跡であるが、当遺跡もこれに該当すると考える。

両地点で見出した遺構群の位置づけと性格を考える場合には周辺部にまで視野を拡げる必要がある。標高700mに位置する上宮拝所推定地を最高所として、そこから始まる参道を下った尾根稜線上には標高667mを最高点とするイケガナル地点の遺構群が、これを南方向に10数m下った鞍部には湯地点の遺構群がそれぞれ営まれており、これらは三徳山山頂部への信仰を軸として繋がりを持つ一連の空間と認識すべきものである（神倉地区に関する各地点の関係は図9とこれを解説した本文参照）。

「湯」地点で確認できた遺構群はその立地と内容からⅠ区～Ⅲ区に分けて検討した。Ⅰ区は山頂部を背負う形の磐座1と周りの石敷帯・集石を中心とし、そこへ向かう通路（参道）の左側には階段状遺構・集石壇・サイトウ炉が、右側には微地形を利用した大型のサイトウ炉を設けた壇状遺構から構成されており、これを「祭祀・儀礼空間」と理解した。Ⅰ区の手前、西側の鞍部には屋内炉を備えた1棟の礎石立建物が設けられ、その北側斜面には階段状遺構が、これを登り詰めると石敷帯の中に祭祀用の集石が並ぶ「参籠施設・祭祀場」が配置され、これらをⅡ区に設定した。さらに三徳山山頂部が直視できる南側微高地の東北側では18基の集石群を確認し、これをⅢ区とした。礎石立建物と北側の大型集石2基、南側の集石群3基は重複して、建物が廃絶した後に、それぞれの集石が設けられている。このような内容の遺構群を持つものとしては、山中修行のなかでも大規模な集団抖擻が行われる入峰修行（峰入り）の参籠拠点となる「^{しやく}宿」が該当すると考えられる。

「イケガナル地点」で確認できた遺構は南北両側に派生する細尾根に挟まれた谷中に営まれ、その構造は主室（^{むろ}室）を中心にして周りに上屋が囲む構造の建物4基（うち1～3は一部が重複）が設けられたものと理解した。この建物は礎石立ちで主室内床面には束石が存在し、壁を持たず、上屋の屋根裾が直接地面に接する構造である。特筆されるのは、屋根裾を受ける箇所は入口部を除いて尾根の高まりを利用（石組遺構1は両側面と後面、石組遺構2は両側面、石組遺構3は右側側面、石組遺構4は左側側面）しており、主室床面より高い位置となっている。南尾根では付け根に方形集石壇を設け、さらに地山面を削って段造成を行い、そこに大中の礫を入れて造成し、かさ上げを行っている（「南土塁」と呼称）。これらの特異な遺構の性格は主室（室）に雪を詰めて貯蔵する「雪穴」（氷室）の可能性を想定している。

次章では当遺跡が持つ課題を示し、全国の類例を示しながら考察を加えることとする。

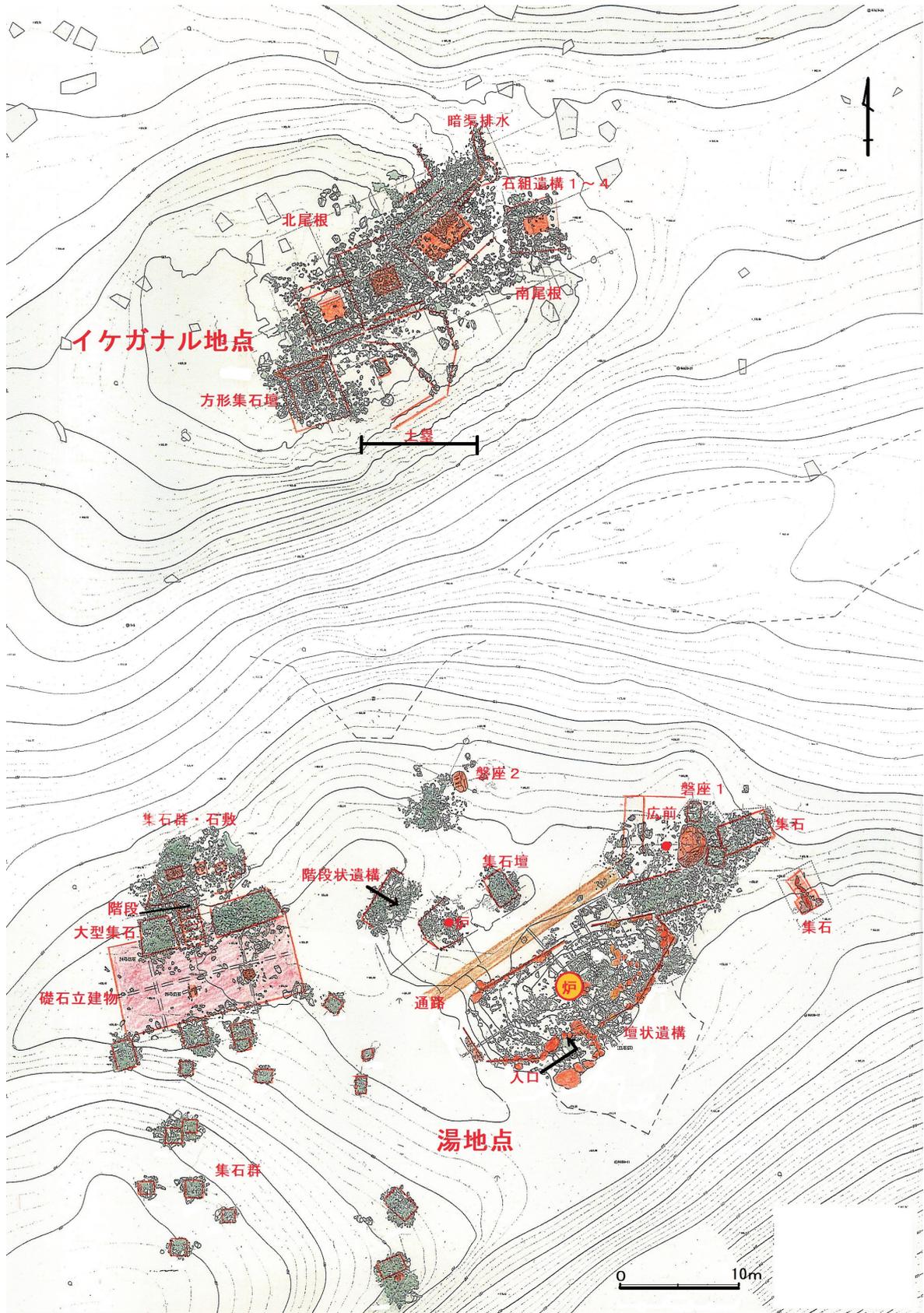


図98 イセガナル地点・湯地点全体図